

特集

My Life is Beautiful!?

ニューヨークで活躍する女性アーティストたちの作品から

昨年11月、ニューヨークの非営利のオルタナティブスペースapexartでレジデントとして滞在する機会を得た。ニューヨークでは、このところ、展覧会や本の出版、シンポジウムなど、立て続けにフェミニズムアートに関するものが続いているという。なぜ、今フェミニズムなのか？フェミニズムアートのシンボリックな作品、ゲリラ・ガールズの「女性はヌードにならなければメトロポリタン美術館に入れないのか？」近代美術の展示作品のうち女性アーティストの作品は5%だが、ヌード作品の85%は女性」(1989年)が2005年に最新データに改訂された。それによると、女性アーティストの作品の数の割合は5%から3%に下がり、さらには、女性アーティストのほとんどがフェミニズムアートの文脈においてのみしか、紹介されなくなってきてしまったのだという。今回のアメリカでのアートにおけるフェミニズムの勃興は、1960年代、80年代に続く第3の波だとも言われている。近年、多くの女性アーティストの活躍は目覚ましいが、その過去を彩ってきた「フェミニズムアートは多くの現代美術の産みの親である」という主張とともに、フェミニズムアートを見直そうという動きである⁽¹⁾。

しかしながら、彼女たちの作品を、フェミニズムアートの文脈としてとらえてしまうことによって、その解釈のみにしばられてしまうことがあるのは残念なことだ。美術はそれが

生まれる時代の社会とは無関係ではられないし、近年の社会の急激な変化において、女性の変化もその一部を成している。また、作家とその表現が表裏一体であるのと同様に、女性たちが表現するときに、女性であることから逃れられない。作品からは自ずと、社会における女性の問題が浮かび上がり、女性問題を議論の中心とするフェミニズムの議論に近づくことも大いにあり得ることである。しかし、彼女たちの作品を必ずしもフェミニズムアートと位置づける必要もないのだろうと思う。

例え、彼女たちの作品がフェミニズムの文脈で解釈することができても、現代の複雑な社会と時代を背景に様々な個性によって生み出された作品は、常に新たな解釈に開かれている。

ここで、ニューヨークで出会った女性アーティストの作品を、「女性の幸せ」をキーワードに紹介したい。私は自分が女であることもあって、女性の作品に共感を覚えることも多いし、自分の問題でもあるから、フェミニズムの問題に重なる解釈をすることも多く、それを大切なことだと考えている。しかし、優れた作品は多様な解釈に開かれている。彼女たちの作品も様々な現代の文脈で解釈することができものである。

女の幸せは美しく生きること！

ドイツ出身で、現在アムステルダムとニュー

ヨーク在住のユリカ・ル德里ウスの作品《フォーエヴァー》は、「幸せであること」と「美しいということ」をテーマにしたビデオインスタレーション作品である。20代の女性たちが、50年後の自分を想像して老女に変身する、やなぎみわの《My Grandmothers》に描かれる女性達の夢の実写版とも言えるかもしれない。ここに描きだされる老女たち(には見えない)は、皆美しく、しかも、誰もが憧れるようなセレブな生活を手にし、現在の生活を謳歌しているように見える。彼女たちは現在も美しいが、若かりし頃から、計り知れないほどの美貌を持っていたことが推測される。「私はとても幸運だったの。今の夫を自分から誘惑する必要がなかったから。」「外面の美しさは重要ではない。大切なのは内面の美しさよ。」彼女たちの姿を見て、まず、老いるということの切なさ、あるいは美というものはかなさと哀愁についての考察を巡らすことはない。画面の中の彼女たち、過去の若かりし頃の自く、現在の自分自身の美しさを思っている。「私は、今ある。」彼女たちを見ていると、なんと素晴らしいと思えてくる。女性が経験をらに美しくなるのだという実感される。現代に生きるの応援歌でもある。この作ディアルによって作られ、普消費する現代の女性の美にし、それとは全く違う美の木の幸せは美しくあることで

現代社会に生きる女性たちは 幸せだろうか？

ニューヨーク在住のシェリー・シルバーのビデオ作品《家を離れることについての37個の物語》は、シルバーが日本に長期滞在した際²⁾に制作したもので、娘と母と祖母という三世代の日本の女性たちのインタビューが編集されたものである。彼女たちはそれぞれ、恋愛、人生、母親や娘との関係、そして願望について語る。とはいっても純粋なドキュメンタリーフィルムではなく、日本の民話に出



ユリカ・ルデリウス《フォーエバー》16分40秒 2006年 ©Julika Rudelius 2006



シェリー・シルバー 《家を離れることについての37個の物語》 52分 1996年
©Shelly Silver

てく「鬼」が登場し、母と娘がさらわれるというフィクションが挿入されるなど、詩的に構成され、画像も美しい。ニューヨークで生まれ育ち、様々な土地を渡り歩いた彼女の視点から見た、異なる世代の日本の女性たちは大和撫子といった日本女性のステレオタイプにカテゴライズすることなどできない。彼女たちは、それぞれの時代で様々な生き方を模索している。シルバー自身の人柄もあるのだろう。シルバーからインタビューを受けている女性たちは、みなリラックスし、かなりプライベートな話にも触れる。母親にも話したことのない妊娠経験と中絶手術の話、娘には仲が悪く見えていた両親が実は愛し合って結婚していたこと、伝統的な価値観に従って生きてきた祖母は自分の人生に満足し、幸せだと感じていること…。日本の女性をテーマにしているから、この作品を見る人は、最初は、現代の日本女性の生き方に興味を持ってみるかも知れない。伝統的な女性像に反発するばかりではない、亭主関白の夫に憧れる若い娘、仕事一筋で家庭を顧みなかった母、登場する女性たちの生き方は多様だ。しかしながら、世間との葛藤、伝統的な価値観との葛藤、母と子の葛藤は普遍的なテーマとなる。1996年に制作された作品ではあるが、女性たちは古

アートの旅「過去・現在・未来」

(彫刻家・名古屋市美術館参与)
石黒 鏑二

寡黙の時 第二話

結局、何も残らなかった。

近代日本彫刻史の第一頁に登場する荻原礫山は、パリから帰国二年後に、三十二歳の若さで病死している。彼は、そのたったの二年間で「女」や「デスベア」「労働者」をはじめとする作品群を制作し、美術史上にその名を残した。凄まじく旺盛な生命の昇華である。

反対に、彼に続く高村光太郎や石井鶴三は、長寿であったが寡作な作家のタイプに属する。何故寡作なのだろう。私は、石井先生と制作を共にしていただいた経験を持つ。彼は、一緒に制作した誰よりも長くアトリエにいたように思う。にもかかわらず、われわれの誰よりも土が付かないのであった。モデルを見る時間が二倍も三倍も違うのだ。

ゆったりとゆっくりと眺められ、ゆったりとゆっくりと土が付く。しかし、そのゆったりとゆっくりは、一見のんびりに見えるがそうではなかった。彼は極度に寡黙であった。そのゆったりとゆっくりの中で、凄まじい精神の凝縮があり、それがはっきりと

われわれを圧倒した。誰も、無駄口も足音もたてない。そこには緊張感だけがかった。

鶴三の高弟である笹村草家人という人と、三ヶ月間程制作を共にした時、私ははっきりと寡作々家の極致を見たように思う。そして、つくるということが、いかに困難であり、過酷であり、凄まじいものかを知ったと思う。

彼はその三ヶ月間、モデルを睨み、芯棒を睨み、そして唸るのであった。粘土は常に最上な状態で用意されていたのだが、それは毎日取り壊され組み立て直される彼の芯棒の上に、ついに付くことはなかった。彼は制作していた。誰よりも早く来て、誰よりも遅くまで。しかし、粘土は最後まで付けられることはなかった。彼は睨み、唸り、芯棒となるであろうと思われる木片を右手に握りながら、モデル台と塑造台の周りを、唸り踊っていた。三ヶ月間、毎日同じであった。彼の踊りが発散する息詰まるような緊張感は今も鮮明である。そして最後に、その粘土と芯棒と彫塑台がきれいに片付けられ、彼の全制作は終了したのであった。

結局、その三ヶ月間の後には、何も残らなかった。今、この作家の名を知る人は一部の研究者を除き誰もいない。手懸かりとなる作品が物理的にないからである。しかし、彫刻家・笹村草家人の名は、場と時間を共有したわれわれの心の中に、今もはっきりと在る。

時の話題

このごろ「若冲」をよく見かけます。江戸時代中期の画家伊藤若冲(1716—1800)のことです。最近ふたつの展覧会がありました。本誌今号の展評でとりあげた「プライスコレクション 若冲と江戸絵画」と、京都の相国寺承天閣美術館の「若冲展」(2007年5月13日～6月3日)です。後者の展覧会では若冲の最高傑作「動植綵絵」(どうしょくさいえ 30幅)が、もともと一緒にあった釈迦三尊像(三幅

対)とともに一挙公開されました。

若冲は、若くして隠居してから10年間に30幅の大画面花鳥画「動植綵絵」を描き、これも極彩色の「釈迦三尊像」とともに相国寺に寄進しましたが、明治期に「動植綵絵」は寺から宮内庁に献上され、それ以来「釈迦三尊像」と「動植綵絵」は離れ離れとなり、「動植綵絵」は、ほとんど見られなくなりました。その両者が120年ぶりの再会を果たすのです。

若冲人気の復活は比較的近年のことです。若冲作品を集めはじめたプライス氏の自宅(米国オクラホマ)を研究者が訪問しはじめ、1971年に東京国立博物館で若冲展が開催さ

れ、辻惟雄氏の『奇想の系譜』(1972)に若冲が加えられた頃から、研究者間では再評価が始まっていました。数年前の京都国立博物館での若冲展は、今日の若冲人気復活の直接的契機でしょう。

釈迦三尊像を中心に、30点の花鳥画が掛けまわされた若冲の小宇宙は、ただ壮観。不思議な無重力感の漂う作品群を堪能し、その空間にいられる幸せさを感じましたが、美術館人として何より嬉しかったことは、見ている人の反応です。普段は美術と縁のなさそうな人たちが「さぶイボがたっちゃう」(部屋は熱気で暑いのに)と興奮したり、「すっ

「げーっ」を連発しているのです。語彙不足ではなく、桁違いの凄さに圧倒されてまさに言葉を失い、その言葉しか出てこないのです。

今日、人々はケータイやネット上のバーチャルなものに慣れきっているように思われていますが、こうした「ホンモノ」はバーチャルとは全く別の感動を、心に直接与えてくれます。「ホンモノ」に出会えば、準備がなくとも感動できると再認識し、同時に美術・美術館の存在意義は確かにあると実感したのです。(hbk)



ジャンネット・ドイル《スター・プロジェクト》 2006年
©Jeanette Doyle

今東西変わらない。精一杯、生きている。

女性の楽しみ!?

アイルランド出身のジャンネット・ドイルの《スター・プロジェクト》は、ドラッグを常用する女性グループとのプロジェクトである。ドラッグを常用するようになってしまった彼女たちは、それぞれに複雑な事情を抱えている。プロジェクトは、ある一定期間、定期的に、彼女の指導のもと、女性たちが、自分自身の興味に従って、素描、コラージュや写真などで作品を創作し、さらに、プロのメイクアップアーティストとファッションデザイナーとのコラボレーションで、美しく着飾り、自身のポートレート写真、あるいは肖像画を制作するというものである。プロジェクトの実行過程では、特に彼女たちが自己イメージを確立し、ゴージャスにオシャレをすること、いわば自分自身のケアを



前竹泰江《Sea of Fertility》12分 2006年 ©Yasue Maetake

するというところに彼女たちの気持ちを向けることが目的の中心におかれる。作品を制作することも自分のポートレートを作ることも、自分自身を認識し、自分自身を愛するための自己回復の試みである。一見、美術を通じての社会貢献プロジェクトのようにも思えるが、ドイルは言う。「これは倫理的な改善のための使命感を持ったプロジェクトでもなく、セラピーなどの治療でもない。あくまで“楽しみ”についてのプロジェクトなのだ、特に自分自身の体における楽しみについての。」とはいえ、このプロジェクトは純粋な楽しみ

を扱ったものは言うに及ばず、日本美術や西洋美術、それともかなり古い時代に関する展覧会のカタログでも、最近では必ずといっていいほど英語の表記が加えられています。とは言ってももちろん本当の意味でのバイリンガルを実践しているカタログはまだ少数派です。バイリンガルを本気で名乗るのであれば、カタログ内の全ての言語表記、すなわち主催者挨拶にはじまり謝辞、テキスト、キャプション、作品解説などなど、あらゆる表記を日本語と英語の二本立てで併記しなければならないわけですが、実際にはその中のほんの一部のみが和英表記になっている、いわばお茶を濁す程度のバイリンガルが大半というのが現実です。当然のことながらあらゆる日本語を英語で併記するためには膨大な時間と労力、そしてかなりの経費が必要なわけで、なかなかそこまで手は回らないが、とりあえずできる範囲で対応しておこう、という結果が今の日本のカタログの実状といえるのかも知れません。ここまで苦勞してもバイリンガルを目指すのは、最近はやりのグローバリゼーションという言葉とも無関係ではありませんが、カタログを、ひいては展覧会を、日本国内だけで完結させずに世界に向けて発信しようとする試みと見ることもできるでしょう。最近日本の現代美術家で世界的に高い評価を受ける作家が少なくありませんが、才能だけでなくその戦略性の高さがこれまでの日本人には見られないものとして注目を浴びています。展覧会もそろそろ従来の枠組みを離れて、世界を視野に入れて戦略を練り直す時期にさしかかっているのかも知れません。(F)

に済まない側面も持っている。プロジェクトの進行過程では、それぞれが抱える問題が次々に沸き起り、それらの問題は、個人的なところに還元されるだけではなく、社会における女性たちの存在の問題も浮き彫りにする。それらの問題を解決することがプロジェクトの目的ではないとはいえ、問題と直面し、持続的に議論することは並大抵のことではないし、アートでは解決できない大きな問題にも対面しただろう。コミュニケーションもプロジェクトの大きな要素である。しかし、ポートレートとしての彼女たちは魅力的だ。女性達の変身をテーマにしたたくさんのテレビ番組同様、美しくなることで、女性は変わるのではないか、そしてアートが社会に貢献できるのではないかという希望を持たせる。

日本人で、女性であること

東京都出身でニューヨーク在住の前竹泰江は、ビデオと彫刻を制作している。ビデオ作品《Sea of Fertility》では、作家自身が、冬の初めとおぼしき寒空の中、水辺で雪玉を投げたり、植物の実を集めたり、枯れススキの種をまきちらしたりして自然と格闘する姿が映し出される。儀式的な要素もあり、どこか神秘的な前竹はシャーマンのようにも見える。作品タイトルは三島由紀夫の小説『豊饒の海』の英語訳でもある。三島の遺作ともなったこの小説は、輪廻転生をテーマにしたものだが、作品にこのタイトルが使われていることで、晩年の三島が描こうとした日本の伝統的な美的感性と結びつけてみたくもなるかもしれない。それは、西洋中心的な価値観に異議を唱え、懐古主義的に東洋の伝統的価値観への回帰を提案していると解釈さ

感想ノートから

大エルミタージュ美術館展

2007年1月5日(金)～3月4日(日)

今回の展覧会は、テレビなどでもかなり頻繁に宣伝をしましたので、期待してお越しになった方が多かったようです。感想ノートに沢山の方が記入してくださいましたが、期待通りだったという方も、期待はずれだったという方もいらっしゃいました。本場のエルミタージュの素晴らしさと比較してご覧になった方もあったようです。

肯定的なご意見をひとつご紹介しましょう。「エルミタージュ美術館の作品はフランスの画家が多く題材もフランスの風景などが多く、今も昔もかわらぬ情景が描かれていてとてもすばらしかった。南仏の海岸線や、パリの市内、ヴェルサイユの庭園など、訪れたことのある土地の当時の記憶がよみがえってきました。とても感動しました。……」

この方のように、絵画を通じて、かつて訪れたヨーロッパの雰囲気を出していただくということは、とても素晴らしいことだと思います。「都市と自然」をテーマとしたこの展覧会では、ヨーロッパの美しい町並みや自然を堪能していただき、ちょっと旅行に行ったような気分でその雰囲気を味わっていただきたいと考えていましたので、このような感想をいただけたことは、大変嬉しいことでした。

もうひとつ、ちょっと面白い感想をご紹介

れる可能性でもある。前竹の作品は、この紙面で紹介した他の作家のように、女性の幸せをテーマにしている訳ではない。彼女の表現は、現代社会が孕む構造的な行き詰まりにおける、現代の人間が持たざるを得ない感性への探求だ。ここで彼女の作品を取り上げたのは、作家が意図せずとも、作品は、日本人の女性が行為しているということから発生する様々なイメージとは無関係ではいられない可能性に注意を向けたかったからである。彼女は、自然崇拜といった古代の日本を思い起こさせるようなイメージも多用する。ニューヨークのような、様々な人々を飲み込むところでは、逆に、他であることを認識し、自分自身のルーツや文化背景を客観的に見られるようになる。しかし、だから、彼女がそれらを使用するのではない。彼女が挑んでいるのは、人間とは何かという問題、様々な要素から成り立つという意味での生物学的な人間存在までも含めた、私たち現代人とは何か、どこにどのように存在しているのかという、あらゆる表現において普遍的なテーマでもある。テーマが普遍的であるがゆえに、彼女の自然な感覚で示されると、日本人であること、女性であることなど、その周縁性をも浮き彫りにしてしまう。でも、彼女の表現は真摯で美しく、それを超える強さも兼ね備えている。

ビデオの中で自然と格闘する彼女は、歴史や世界の一部でしかあり得なくとも、その中で無駄だと分かっているが必死に生き、その証を残そうとしているのか、あるいは何かの一部であることから必死にのめりようとしているのか。人は常に様々なカテゴライズ化された社会と個との葛藤の中で生きている。どこか自分自身の姿にも重なってくる。(hina)

- (1) 参考資料：ARTnews 2007 February
- (2) 1994年に名古屋市美術館に来館、講演会を行った。

します。「『落ちこんで』をみて、落ちこんでもよいんだ!! って前向きな気分ですがすがしくなりました」ゴキゲンです。」

《落ち込んで》という作品は、パーティーから帰ってきた女性が部屋で一人、頭をかかえている情景を描いたものです。若さが儂いものであることに思いを巡らしているという解釈、それから、自分の運命を思って悲嘆に暮れているという解釈がありますが、いずれにせよ、女性は大変落ち込んでいます。この絵を見て「落ちこんでもよいんだ」という前向きな感想を持たれた方もいるのだと思うと、絵画というものは、本当に様々な影響を人にもたらすものだな、と感じます。

さて、今回の感想ノートには、もちろん、美術館に対するご要望も数多く寄せられました。その中で、最も多かったのが、照明によって画面が光ってしまって見づらいというものです。照明に関しては、画面が美しく見えるように工夫していますが、絵の表面に厚く塗られたニスの影響もあるのか、どうしても光ってしまふところがあったようです。今後、出来る限り見やすくするように努力していきたいと思っております。そして、人の流れがスムーズではないことへのご指摘もありました。今回は、大変多くの方にご来館いただきましたので、混み合って来た場合の人の流れに対する配慮が、今一步、必要だったかと思えます。とはいえ、多くの方にご来館いただいたことは、大変有難いことだと思います。皆さん、ありがとうございました。(akko)

展覧会 現在進行形

兵庫県立美術館＋名古屋市美術館同時開催

特別展

「河口龍夫―見えないものと見えるもの」

名古屋：2007年11月3日(土・祝)－12月24日(月・祝)
神戸(兵庫県立美術館)：10月27日(土)－12月16日(日)

現代美術作家・河口龍夫(1940－)は、1970年来、〈関係〉というテーマの下に様々な現象を視覚化する作品を制作・発表してきました。熱や光、電流といったエネルギーの流れ、鉄や銅の錆による質の変化、さらには種子を鉛で覆う作品など、それらは存在と不在、見

えるものと見えないものを対比させながら、人間と物質との間の「気配」や「存在」そのものについてまで“默示”するものとも言えましょう。

1970年代以後のわが国の現代美術をリードして来た河口龍夫の作品については、『大地の魔術師展』(1989年、パリ・ポンピドゥーセンター)やベルギー・ゲント現代美術館での展覧会など、海外に於いても、西欧の文脈とは異なる独自のものとしても高く評価されています。

名古屋市美術館と兵庫県立美術館では、河口龍夫の表現を分析し、各美術館個別のテーマを打ち立て、従来の巡回展ではなく、同時開催の形で展覧会を開催することとなりました。

現存作家の新作を含めた展覧会を巡回ではなく、同時に開催するという企画は、これまで開催されたことはありません。面積や高さ

いった、展示空間が異なる二つの美術館で同時に開催する場合は、作家の力量は勿論のことながら、それぞれの美術館の学芸員の表現に対する理解と批評を、各自の美術館のスペースでどう紹介するかが試されることにもなります。作家を交えた二つの美術館の打ち合わせに於いても、互いの展示プランを横目で見ながら、ライバル意識やエゴを悟られることなく、粛々と構想を組み上げていくことになりました。

展示構成と出品候補作品の割り振りをした結果、神戸では初期の絵画作品から、光と闇をテーマにした作品、さらには連をモチーフとした作品群を、また名古屋では種子と鉛による作品を中心に、観る者に時間の観念や生命についての考察を誘う作品と構成を予定しています。さらに両美術館とも新たなインスタレーシ

ョン(空間)作品を制作・公開し、現代美術の現況についても検証する機会とすべく現在、調整と交渉を進めています。また、会期期間中には名古屋と神戸を往来する鑑賞ツアーや、ワークショップも予定しています。ご期待下さい。(J.T.)



河口龍夫氏との打ち合わせ光景

どこがおもしろい？！

たて80.3cm、よこ99.7cmの大きな画面の中に、色の濃い赤土の平原が遠くまでつづく風景が見えます。画面の右側から、発掘された遺跡のようにも見える3つの家の壁が、左上のほうへだんだんと奥まっっていくように並んでいます。平原は途中で一段高くなっているの、地平線が高く見え、空は画面の上のほうに少しだけのぞいています。空は普通よりもずっと濃い群青色で、ところどころにかすみのような雲がかかっています。全体的に影がはっきりしていないので白昼のようですが、濃い色合いのためそのような明るさはありません。地面には草木や石ころが見当たらず、四角く空いている窓や扉のむこうに人の姿も見えません。

画面の一番手前、やや左寄りに素朴なテーブルが置かれています。テーブルの上には割れたざくろやカットされたメロンが置かれ、大きなボール皿には桃など9つのフルーツがもられています。ねじ巻き様様の紫色の水差しと、緑色の大きなグラスもあります。テーブルはその脚が見えないほど私たちのほうに近づいているので、「テーブルの上を見てください」と言わんばかりのようです。しかし、あまりにも手前にあるので、かえてその向こうの景色が気になって、視線を遠くへ向けてしまうかもしれません。全体的に濃厚な赤茶の色合いが多いので、メロンの黄緑が明るく見え、空の青さ、グラスの深い緑、水差しの濃い紫が印象的に目に映ります。

この作品はマリア・イスキエルド(Maria Izquierdo,1902－1955)というメキシコの女性画家が1947年に描いたもので、《生きている静物(Naturaleza viva)》というタイトルで呼ばれています。

「なんで建物の外に机があるの？この果物を

食べる人はいないの？題名が意図していることは何？作者はなぜこの絵を描こうとしたのか？などなど…」(猫のタマさん 20才)

この画面をながめているといろいろな「？」があたまに浮かんできます。2007年1月から3月までの展示期間中に寄せられた来館者の皆様のご意見を紹介します。(nori)

「背景の全体の色落ちした感じや、空の深い青色、壁の風化した感じに対し、果物が色鮮やかに描かれていて、みずみずしさがとてもでているように感じました。また、水差しやコップがそれを更にひき出しているようにも思います。」(akihiroさん 22才)

「ただ置いてあるだけでは分からない生命の脈うつ様を果物の内部をみずみずしく描ききることで見事に生かしている作品だ。」(C(∧ω∧)っさん 22才)

「静物画なのに屋外にあるのは珍しい。」(坊野たん² 29.2才)

「バランスがとれているのかとれていないのか、ふと人を絵の中にひきこんでしまう。もしかしたらあぶってみると、ひとがうかんで



マリア・イスキエルド《生きている静物》 1947年

きそう。」(Hさん 14才)

「誰のために置かれた果物なんだろう？荒廃した土地っぽいし…なんだか供物みたい。人間が食べるためのものじゃないような気がする。」(じゅんこさん 25才)

「メロンの切り方が変。上の部分は食べたのか。」(マツさん 24才)

「この青いグラスから顔がうかんできそうでこわいです。みずみずしい色の対比が、怖さばいぞうです…」(うふさん ？才)

「たべっぱなしですか。色がどんどん変わっているからたぶん…くさっているんじゃないかなああ。でもよく見たらお皿とかキレイだから、とられちゃうよう♪(…)¹～5年ぐらいたてば、ハエがブン²だよ。」(？さん ？才)

ないので、限られた条件の中でいかに自分の理想に近づけるかで企画した学芸員の力が試されます。作品の観やすさや会場内での人の流れなど、来館者への配慮もここで検討されます。

この原稿執筆中に開催しているダリ展では、①初期油彩作品→②写真資料→③1945年までの油彩作品→④挿絵作品→⑤オブジェとグラフィック作品→⑥著作物と草稿→⑦広告媒体とファッション→⑧1946～63年の油彩作品→⑨1964～83年の油彩作品、と会場が細かく分かれています。画家として広くその名を知られるダリが、著述家、グラフィックデザイナー、衣装デザイナーとしても活躍し、数々の作品を残したことを知る人はさほど多くありません。画業以外の活動が決して余技

「全体的に濃い色が使ってあって“暑苦しい”感じ。暑苦しい中で果物はだんだんうれていき、そしてくさっていく。“生きている”ということは“変わっていく”ということじゃないのかな。と、周りを見ると壁も窓も風や空気、太陽の動きでどんどん“変わっていく”。“生きている”んだな。」(？さん ？才)

「果実よりも壁や坂道の方がジューシーに見えます。対象物に一瞬目が行きますが、この空間自体が食欲を誘発しているように感じます。ただ、生きているのは『静物』ではなく、さっきまでいたかのような人の気配の余韻なのでは？」(？さん ？才)

「この街は砂漠の中にある廃墟です。果物はこの街にやってきた人間をつかまえるためのわなです。『食べ物がある！』と近寄るとわなにかかってしまいます。それまで果物のフリをしていた妖怪は人間にとびかかります。この果物はわなにかかる人間を待っている、『生きている静物』なのです。」(藻さん ？才)

「乾いた廃墟…これはむろん作者の淋しい心を表している。そこを中心にみずみずしい果物が描かれているのは乾いた心を少しでも癒してほしいという願望の表れ。ここで注目すべきは手前の割れた果物と1つしかないグラス。割れた果物は皆で食べれるように置かれていることからたくさんの仲間がほしいという作者の寂しさの表れ。しかしグラスは1つ、もちろん作者の分だけ。ここに仲間のできない作者の欲の強さ、慢心が表れているのだろう。」(？さん ？才)

「見るもの全ては焼けてしまった。ただ変わらずそこにあるのは青い空だけ。もう一度明日をつくるのか…今日で幕を下ろすのか…さあ、ひとまず語り合おうじゃないか！の、時の為のおやつ。」(？さん ？才)

ではなく、ダリの中で重要な位置を占めていたことが展示を通して伝わるよう、あえて絵画作品を分散させて著作物や立体作品と対比させたり、展示空間の一部にダリの手がけた万博バヴィリオンを想起させるような造作を加えたりしているのです。

なかなか見られない名画と対面することや自分の好みの作品を発見することも展覧会の楽しみ方のひとつですが、いちど推理探偵になったつもりで、順路どおり作品をたどって企画者のねらいを探ってみてください。今まで体験したことのない展覧会の醍醐味を味わえるかもしれませんよ。(3)

*ご質問を取り上げさせていただいた豊橋市のK.Nさんには、「中村宏展」の招待券をお送りします。

美術館Q&A

「『順路』が決まっているけれど、それはどういう理由で決めているの？」

このコーナーを始めて以来、最も多い質問のひとつが順路に関するものです。ほとんどの来館者にとって展覧会は“見る”ものであり、「作品を見る順番」について訊かれることがとても多いのですが、展覧会を準備する学芸員にとっては「作品を“見せる”順番」をどう決めるかという質問になります。

ひと口に展示の仕方と言っても、展示する作品や取り上げる作家、企画者のねらいなど

によって決め方はさまざまです。時代、テーマ、技法などの基準にもとづいて空間を区切ることもあれば、展覧会場そのものを一つの空間として演出することに心血を注ぐこともあります。大まかな構成を決めた後で具体的な展示プランを組み立てますが、個々の作品の配置を決める作業は一筋縄ではいきません。会場の広さや展示作品の大きさなど、物理的な条件をあらかじめ頭に入れて計画を立てるものの、手元に集まった作品を実際に並べてみるとしっくり来ないことも間々あります。画集と展覧会とのもっとも大きな違いはここです。隣り合う作品の位置を一つ変えるだけで文脈が変わってしまい、伝えようとするねらいに狂いが生じるのです。もちろん理想のプラン通りに展示できることなど滅多に

内」が特選となる。この年東宝の美術部嘱託として入社し、翌年には東京宝塚劇場ロビーの壁画制作、名古屋松坂屋における個展など活躍の場を広げたが、1936(昭和11)年4月、自宅の画室において、自らその生涯を閉じた。

質・量ともに最も充実した創作活動が行なわれたのは滞欧期であり、エコール・ド・パリの空気を吸収して異邦人の眼で見た情景を描き出した。帰国前の小堀四郎宛の手紙では「……我々には正しく我々の国民性のはっきりした仕事が出て来なければ嘘だと云う遠大な希望があるのだ。しかし、それにはもっと世紀的な学問を要するから、……」としており、欧州に渡った当時の洋画家たちの誰もが抱いた苦悩を彼も深く抱いていたことが伺われる。(akko)



佐分真《食後》 1931年頃

永井 訟三(ながいしょうぞう／1899－1980)

永井訟三は、1899年9月4日に名古屋市に生まれ、名古屋商業学校を卒業後、日清製粉株式会社に勤務しながら、サンサシオンの中心的な画家であった鬼頭鍋三郎に師事して、洋画を学びはじめた。

1930年の第7回サンサシオン展に《静物》《冬の風景》が初入選して、翌1931年の第8回展には《公園の池畔》《新緑の頃》《志摩波切村》《椅子を配せる静物》が連続入選して、サンサシオン賞を受賞した。さらに1932年にはサンサシオンの最後の新会友となり、第9回展に《冬枯れ》《山村風景》《橋のある風景》《草原の冬》《公園の池畔》を出品して、最終回となった1933年の第10回展には、《森へ行く道》《水辺》《樹間風景》《新緑の篠島》《志摩波切》《怒涛》《阿佐ヶ谷の夏》を出品した。

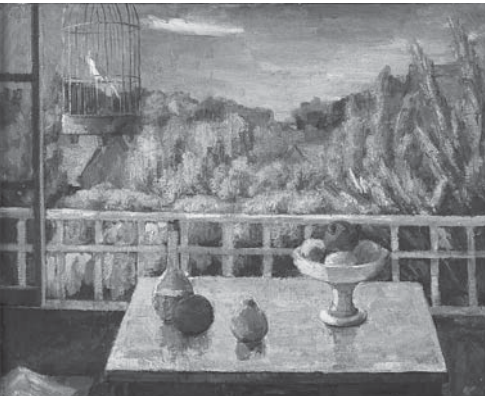
この間に、1930年の第8回春陽会展に《公園の池畔》が初入選して、翌1931年の第9回春陽会展には《晩秋の池畔》《初秋の窓際》が連続入選した。また1932年の第19回光風会展には《草原の冬》が初入選した。

この頃には本格的に絵画を学ぶために上京したこともあったが、1934年に請願によって郵便局を開局したために、次第に絵画から離れることになった。画家としての制作期間は1920年代末から1930年代頃までのわずか10年程であったが、自宅二階の窓際のテーブルに

置いた静物と屋外の風景を描いた《窓際の静物》のように、数少ない遺された作品を見ると、穏健で明朗なサンサシオンの写実的な画風(安定した構図と清明な色彩)によって、自宅の周辺や鶴舞公園、篠島や伊勢志摩の波切村などの身近な風景を描いていたことがわかる。

この他の画歴として、愛知社展(愛知社賞)、東海美術展(会頭賞)、名古屋市美術展(市長賞)、郵政美術展(優秀賞)などにも出品(受賞)して、東美会の会員として活躍した。また個展も数回開催した。

郵便局に定年まで勤めた後、1980年9月29日に死去した。(sy)



永井訟三《窓際の静物》 1930年頃

展評

2007年4月13日(金)～6月10日(日)
愛知県美術館

「プライスコレクション 若冲と江戸絵画」

いやはや何とも凄いコレクションです。日本美術の大コレクターとしてのプライス氏の名前は、門外漢の私の耳にも届いており、そのコレクションの一端を他の展覧会で散見することはありましたが、こうやってまとめて見せられて初めてそのスケールの大きさと質の高さを実感することができました。しかも個人コレクションにありがちな極端な趣味の偏りというものがない。確かに若冲、応挙、芦雪などプライス氏が好まれる作家の厚みは群を抜いており、それがこのコレクションの特徴ともなっているわけですが、作風や画題という視点で眺めた時、その幅の広さ、多様性は驚くばかりです。よくぞここまで自由に、自らの感性を信じて作品を選べるものだと感心することしきりです。プライス氏自身によれば、氏はいかなる助言も受けることなく、また知識や偏見に縛られることなく作品の蒐集を行ったそうで、日本語の読み書きが十分

CULTURE, MOVIE, DRAMA, MUSIC & BOOK

今年は、隔年で開催されるベニスビエンナーレはじめ、5年ごとのドイツ・カッセルのドクメンタ、そして10年ごとのミュンスター彫刻プロジェクトなど、ヨーロッパでは現代美術の大きな催しが目白押しです。スイスで毎年開催されるアート・バーゼルも含め、そのほとんどが6月にオープンするので、この期間は、世界中から多くのアート関係者がヨーロッパに向かうのではないのでしょうか。それらのアートイベントに先駆けて4月23日～29日までオーストリアのウィーンではヴィエナアートウィークという美術の催しが開催されました。今年で3回目を迎えるこの催しは、その名の通り、1週間ウィーンでアートに触れるというイベントで、中央、東ヨーロッパのアートマーケットの中心となっているヴィエナフェアと同時に開催され、ウィーンの様々な美術の機関が、ウィーンや世界中から訪れる美術関係者に向けて、様々なプログラムを用意していました。ウィーンは音楽と芸術の都として、あるいはハプスブルク家が築いた豊富な歴史的遺産とともに観光都市としても知られた街です。ヴィエナアートウィークは、そのウィーンを美術の街としても知られるよう国際的に発信していこうと、2005年にウィーン市内にある25の美術館や博物館、美術大学、そしてギャラリーアソシエーションが一体となって始められました。そのコンセプトは「Take Time Meet Art Vienna(時間をとって、美術そしてウィーンと出会う)」。アーティスティックディレクターのブンケンホーファー氏によると、ウィーンは他の大都市、ニュー

にできなかったことが逆に幸いして、無用な知識に振り回されることがなかったと謙遜しています。固定観念や先入観に惑わされてはいけないということは誰もが知るところですが、知っていることと、それを実践できることとは別物で、強い意志と自由な心を持つ氏だからこそこのようなコレクションが可能になったのでしょう。中味が優れているだけでなく、この展覧会は展示方法でも注目すべき工夫が見られました。一つは照明の明るさを変化させて作品を鑑賞するというものです。刻々と移ろう光の中で鑑賞してこそ日本美術の真価は発揮される、というプライス氏の考えを実現すべく、会場の一部に特殊な装置が設けられ、同じ作品を様々な光の下で鑑賞するという希有な体験を持つことができました。もう一つの工夫は、多くの作品がガラス越しにではなく、裸で展示されることにより、精妙な絵肌をより深く味わうことができたという点です。いずれも画期的な展示手法といえると思いますが、それもこれもプライス氏の作品への愛情と偏見の無さが生み出したものといえるでしょう。本当に教えられることの多い展覧会でした。(F)

ヨークや東京のような慌ただしさがなくて、時間がゆっくり流れ、街もコンパクトで、人々はゆったりとカフェで時間を過ごす、アートウィークでそういうウィーンらしさに触れてもらいたいのだといいます。ヴィエナアートウィークは世界中の都市で開催されているアートビエンナーレのような大きな一つのイベントではなく、ウィーンの街中に小さなアートシーンがたくさんある、そういったウィーンらしいものにしていきたいということでした。オープニングのウィーンを代表する美術館の館長討論では、ウィーンのアートをいかに国際的な文脈で発信していくかというテーマで、激論が交わされました。クリムトやシーレだけではなく、優れたオーストリアの美術を、外国人が評価してくれるのを待つのではなく、自分たちが評価し、位置づけをして世界に発信していかなければならない、また、ウィーンのアートシーンの重要な部分を構成する、現代美術の分野にもっともっとお金と力を入れていかなければいけないと強く主張されました。近年変化の激しい日本の公立美術館の状況下にある私たちも、日本のアートシーンの一部として、私たちができることについて、もっと考えていきたいと思いました。(hina)



パネル・ディスカッション“Content Counts! Vienna's Museum as Think Tanks for the Art World?„ ©Rainer Fehrer, 2007

協力会通信

新緑さわやかな5月13日(日)、恒例のバスツアー。大阪方面に出かけ、大阪市立美術館、東洋陶磁美術館、そして国立国際美術館を訪問しました。天王寺にある大阪市立美術館では、バリのギメ美術館に所蔵される浮世絵の名品展です。午前11時頃に到着すると、前評判の高いこの展覧会の会場内にはすでに多くの来館者。これは大変と、予定していたレクチャーを省いて見学しました。退室時には入場制限で一時間待ちの状態となっていました。この展覧会、個々の作品のレベルが高く印象的でした。早い時期にヨーロッパに渡った浮世絵作品は、利用の機会も少ないまま今に至ったため、概して保存状態は良いのですが、出品作品には特に優れていたのが印象に残ります。混雑をあとに、通天閣のある大阪テンコ盛りの新世界で昼食。食事を早めにすませた参加者は、たこ焼きを買いに走ったりと、大阪

気分を満喫。中之島にある大阪市立東洋陶磁美術館では、25周年記念の特別展「美の求道者・安宅英一の眼―安宅コレクション」を見学しました。これが大変よかった。周年記念ということで、コレクションを総動員。ともに国宝の飛青磁花生や油滴天目茶碗はもとより、説明の不要な純粋な焼きものの美しさを堪能できました。収集ジャンルを絞った単科美術館ならではの魅力を感じることができました。照明や、空間の取り方、シナリオ構成など、展示手法もすぐれたものでした。これも中之島にある国立国際美術館。施設すべてが地中に造られています。開催中のベルギー王立美術館展を見学。16、17世紀フランドルの巨匠たちや、ベルギーの特色ある象徴派(クノップフラ)やらシュルレアリスム(マグリットら)など、楽しむことができました。毎年2回、春は日帰り、秋は一泊二日で開催してきたツアー、そろそろ行くところがなくなってしまうような気がします。大丈夫、まだまだ見るべき所はあります。(hnh)

展評

2007年4月1日(日)～4月29日(日)
gallery アートフェチ

高須健市展 SURFACE

会場の壁、床、天井にルイ・ヴィトンのモノグラムがくまなく張りめぐらされている。観客は、入口で靴を脱ぎ、その空間に入る。高須のモノグラムはカラフルで、本家ルイ・ヴィトンの「モノグラム・マルチカラー」シリーズの軽さが思い出される。白い平面にモノグラムが浮かぶ空間は、モノグラムの配列が作り出す構成上の錯視が不安定な感覚をもたらして落ち着かない。「ブランド好きの日本人だから、バッグや服だけでなく、家具やインテリアがあってもおかしくないか」と思っていたら、色のまだらなモノグラムが紙で、チラシや雑誌を切り抜いたものと気づく。「もの」としてモノグラムが見えはじめたら、ひとつひとつがきれいに貼られているのではないことが見えてきて、面が面として立体としても感じられるようになった。文様としてモノグラムを壁面と一体で見ていることから感じられた幻視の空間とは異なる、物質としての空間が並立して見えてきたわけだ。チラシや雑誌から作られたモノグラムには、私たちの野卑な日常が断片となって現れている。深読みかもしれないが、無造作に切り取ったと思えるモノグラムも、ピンク広告のそれなどから使い方を計算していると感じられた。高級ブランドと卑近な日常が地続きでつながる現象としての一体感と内実とのギャップ。

イベントガイド

■特別展「中村宏・図画事件 1953―2007」
7/21(土)―9/17(月・祝)
戦後社会の動向を見つめた「ルポルタージュ絵画」や、機関車やセーラー服などをモチーフとしたシュルレアリスム風絵画など、1950年代から現在まで常に独創的な世界を展開してきた浜松生まれの画家、中村宏の初の回顧展です。
○記念対談 8/5(日) 14:00―
講師：中村宏氏(画家)、中原佑介氏(美術評論家・兵庫県立美術館館長) 申込不要・無料・先着180名
○解説会 9/2(日) 14:00―
講師：山田諭(当館学芸主査) 申込不要・無料・先着180名
■コレクション解析学2007―2008
名古屋美術館所蔵の美術作品の中から、特定の作品を詳しく紹介する講座です。
第2回 7/29(日) 14:00―

◆夏休みこどもの美術館「プレイ！」
A. おどる 8/2(木)、8/3(金) 10:00―12:00
講師：山田珠実氏(ダンサー/振付家)
対象：8/2(木)小学1-3年生 8/3(金)小学4-6年生 参加費：100円 定員：各回15名 申込〆切：7/10(火)
B. 鳴らす 7/29(日)、8/11(土) 14:00―16:00
対象：7/29(日)小学1-3年生 8/11(土)小学4-6年生 参加費：100円 定員：各回20名 申込〆切：7/10(火)
C. あそぶ 8/21(火)、8/22(水) 10:00―16:00
の間に実施
モディリアーニ《おさげ髪の少女》をたのしくアレンジします。どなたでも参加できます。 申込不要・無料
*9/4(火)―9/17(月・祝)の期間、常設展示室3にてそれぞれのプログラムの活動の様子を紹介します。
◆美術館の「キッズの日」+「おとなの日」
●なりきりアーティスト 9/16(日) 13:30―15:30
作品を「つくって」たのしむプログラムです。対象：こども(小中学生)とおとな(保護者)とのグループ 参加費：こども(小中学生)400

作家の関心はこのあたりにあるらしい。展覧会のタイトル「SURFACE」は、「表面」という意味。「なるほど上っ面か」と思ったが、作家のホームページを覗いたら、「あえて和訳するなら『上っ面』が正しいと思う」と記してあった。モノグラムの材料は、道行く人がポイ捨てしたゴミ。高須のことば。「僕はルイ・ヴィトンのコンセプトやデザイン性を尊敬しています。この作品で批判しているのは、そのブランド力にすがっている消費者の方です。ゴミを平気でポイ捨てする人々と節操なくブランド力にすがっている人々は、限りなく近いと感じるからです」「節操なく」、か。どれほどの人がルイ・ヴィトンのクラフトマンシップを理解しているのか。これも「上っ面」。高須の作品を見たのは今回が初めて。1980年生まれで名古屋造形芸術大学卒業の若い作家。これから見てみたいと思わされた。モノグラムには著作権や商標権があるため、会場図版の掲出の可否をルイ・ヴィトンに問い合わせた。ご遠慮いただきたいと穏やかに答があったが、もっともだろう。他のブランドでも同じと思う。表現をめぐるひとつの話題として記す。会場が土日のみの開廊であるのは惜しまれるが、ガラス張りの路面から展示を目にすることができる。ウィンドウショッピングよろしく、それはそれで「上っ面」を引っかける感じの体験だ。(み。)

ティナ・モドッティ《アステカの赤子》(1926―27年頃)について
演題：愛に、芸術に、そして革命に生きた女性写真家のまなざし
講師：笠木日南子(当館学芸員) 申込不要・無料・先着180名
第3回 9/30(日) 14:00―
岡本太郎《明日の神話》(1968年)について
演題：「炎の中で咲く笑う骸骨」の意味とは？
講師：山田諭(当館学芸主査) 申込不要・無料・先着180名
■フライデー・ナイト・シアター
8/10(金)、9/14(金) 18:00―
毎月第二金曜日の夜間開館時に開催。アート・ドキュメンタリーなどを上映します。作品は決定次第ホームページでご案内します。 申込不要・無料・先着180名
*名古屋美術館は、7/12(木)―7/20(金)の期間、臨時休館します。8/13(月)は臨時開館します。

円 おとな(高校生以上)400円 定員：10組 申込〆切：8/31(金)
●「おとなの日」アート・ウォッチング
10/27(土) 13:30―15:00
ひとりでは味わえない美術鑑賞を提案するおとな向けのプログラムです。対象：おとな(高校生以上) 参加費：400円 定員：20名 申込〆切：9/30(日)
●特別イベント 9/24(月・祝)、10/14(日)
何がおこるかはお楽しみです。美術館にあそびに来てください。 申込不要・無料
★申込方法
官製はがきに①住所、②参加者(グループは全員)の氏名(ふりがな)、③こどもの学年(さしつかえなければ年齢も)、④電話番号、⑤希望のプログラム名と日時を記入し、「夏休みこどもの美術館」係(または「キッズの日」係)まで申込みください。はがき1枚で1プログラム1名(または1グループ)の申込みとさせていただきます。申込みが多いときは抽選し、当選の方にはプログラム実施日の10日前までに参加証をお送りします。詳しくはホームページをご覧ください。

【編集後記】
「北斎とお楽」という芝居を観に行きました。スーパー一座の原智彦氏が北斎を演じ、音楽や振付も担当。北斎の日常と奇想天外な登場人物、美しい映像が併さって、幻想的ともいえる舞台となりました。鶴舞駅近くのJR高架下にある狭い空間でしたが、中は50人ぐらいの観客たちの熱気でむんむん。時々電車が通るゴツという音がして、それとも、面白かった。若者が多かったこともあるのでしょうか、観客たちの、何が始まるのかワクワクと期待する感じ、そして観ている時の興奮、それらの醸し出す空気が何か心地よく、楽しく感じられました。
転じて美術ですが、美術って確かに静かに観るものだけど、あの芝居を観る観客の生き生きとした姿を見ると、名古屋のアートシーン全体にこんな熱気が欲しいなあ、と思ったのです。名古屋のアートシーンといえば、このアートペーパーも情熱ながらその一端を担っていると思うと、少し身の引き締まる思いもいたします。(akko)

アートペーパー第74号 発行日：2007年7月1日
発行 名古屋美術館 [白川公園内]
http://www.art-museum.city.nagoya.jp/
〒460-0008
名古屋市中区栄二丁目17番25号
地下鉄「伏見駅・大須観音駅」下車
Tel.052-212-0001 Fax.052-212-0005
休館日：毎週月曜(祝日の場合は翌日)
Nagoya City Art Museum